

---

# ばらとみつばち

宵山 芭子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ばらとみつばち

### 【Nコード】

N1489E

### 【作者名】

宵山 苺子

### 【あらすじ】

ばらとみつばちを題材にした童話です。

あるところに、ばらが一りん咲いておりました。

もえるようにまっかな色で、みずみずしくきらきらとかがやいた、とてもとてもうつくしいばらでした。

あるとき、アブラムシがばらをみかけてこついいました。

「ああ、なんとあまいあまいみつの香りがするんだろつ。おいばらよ、ばくにそのおまえのみつを分けてくれないか？」

すると、ばらはにっこりとほほえんでいいました。

「ええ、もちろんですとも。さ、どうぞたっぷりたっぷりもっていつてくださいな」

アブラムシは、しめたとばかりにさっそくいそいとばらのくきを登ろうとしました。

ところが、ばらのくきにはとげとげがびっしりとあったのです。

これをみたアブラムシは顔をまっさおにして、こつ言いました。

「やれやれこれはのぼるのにはむつかしい。ああ、ざんねんだがあきらめるとしようかい。」

そうして、とつとことつとこ、と来た道を帰って行ったのでありました。

ばらはたいそうがっかりして、しょんぼりとかたをおとしました。

次の日、ばらのもとへ何百匹ものありたちがおとずれました。

「アブラムシのだんなからきいたのだが、たしかにあまいあまいか  
おりがする。これはさぞおいしいみつがとれるだろう。なあ、ばら  
よ。われらの女王のためにみつをわけてくれないか？」

するとばらは、昨日よりもきらきらとした顔で答えました。

「ええ、もちろんよ。ぜひもっていつてくださいな」

するとありたちはよろこんで、さっそく準備をはじめました。

「ふむ、アブラムシのだんなからきいていたが、こいつはたいそう  
やっかいなとげとげだ。やい、一番部隊、準備はじめい！」

隊長ありに言われ、一番部隊のありたち百匹はすぐさまとげとげを  
のぼりはじめ、くきにしがみついてありのはしごをつくりました。

「つぎは二番部隊いけい！」

二番部隊のあり百匹は、くきにしがみついているはしごありたちの  
うえをのぼって、一番部隊ありのはしごの上にまたはしごをつくり  
ました。

「つぎは三番部隊、いけい！」

三番部隊のあり百匹は、一番部隊ありのはしごの上につくった二番

部隊はしこの上を歩いて、ようやくばらはなびらにとつちやくしました。

「あらあら、ずいぶんとたいへんだったのね。」

ばらがきよときよとと辺りを見回しながらこう言つと、ありたちはにつこり笑つて答えました。

「いえいえ、これがぼくらのしごとです。」

そうしてしばらくのあいだ、ありたちはかわるがわるばらのみつをはこんでいったのでした。

さいこの一滴をはこびおわると、ありの隊長はいいました。

「いやいやどうもありがとう。これでぼくらのしごとはおわりました。」

そうしてありたちは、来た時よりもずっと少ない数で帰つていったのです。

ありたちの行列を見送つたばらがふう、とため息をついてばらが足元を見降ろすと、そこにはばらのとげとげにひっかかった一番部隊のあり百匹と、二番部隊のあり五十匹の死骸が転がっていました。

ばらは、それを見てびっくりして泣き出します。

「ああ、ああ、わたしのとげとげのせいなのね、ごめんなさい、ごめんなさい。」

ばらは泣きました。なぜでしょう。なぜだか涙がとまりませんでした。

「わたしのとげは、むしをまどわすいけないものなのだわ。ああ、ああ、なんてわたしは罪深い。」

ばらは、自分のとげとげのために泣きました。

なんて悲しい涙でしょう。その涙は、露となってぽたりと地面におっこちて、すぐに消えてゆきました。

何日かすると、一匹のはちがぶうんとばらのところへやってきました。

「やあやあいい香りがするね。きみのみつのおいだね。」

「あらはちさん。でもだめよ。わたし、もうきめたのよ。だれにもわたしのみつはあげないって」

「おやおやおかしなことを言う。僕がみつをもらえなかったら、いったいどうやってきみは種をまくんだい？」

「だってわたしがみつをあげるなら、あなたはわたしのとげとげにさされて傷つくかもしれないのよ。わたしはそんなことたえられないわ」

するとはちはいじわるな顔で笑いました。

「どうしてそんなことをいうのさ。きみはばら。ぼくははち。まったく関係ないふたりだろう？ どうしてきみがかなしまなけりやらないんだい？」

ばらはこまったように首を傾げました。

「だってわたしのとげとげで、このあいだたくさんのおりさんたちが死んでいったのよ。わたしの足もといっぱいのおりが死んでいたの。そのときわたしはかなしくなったの。あんな思いはもうたくさん。」

はちは、わざとらしくうんうんとうなずきました。

「へえ、それで？ おりたちは女王のために死んでいったのに。きみのとげがいくらありを死なせようとも、それはきみじゃなくおりの女王のせいじゃないのかい？」

このことばに、ばらはむっとしていました。

「あら、ずいぶんなことをいうのね。おりの女王はわたしのみつがほしかっただけなのよ。おりたちはそんな女王のためにみつをとどけたかっただけじゃない。」

「そうだね。それはきみがみつをもって行ってほしいのとおなじよ。うなもんだ。」

「そうよ、女王はわるくないじゃない。」

「じゃ、きみもわるくないじゃない。女王はみつをほしがって、きみはみつをもらってほしかった。ありたちは女王のために働きたかった。そしてすべての願いは叶ったんだよ。さて、なぜきみはありたちが死んで悲しいと思ったんだい？」

ばらはますますこまってしまいました。

「だって…それは…ありたちが、」

「ありたちは使命をまっとうしたのさ。なぜきみはそれを悲しむひつようがあるんだい」

「ありたちが、わたしのとげとげで死んだからよ。」

そこまできいたはちは、にんまりわらってこういいました。

「ねえ、ばら。きみは自分のとげが憎いかい？みつをもつていかせないための、むしをよせつけないための自分のとげが、そんなに憎いのかい？ちがうだろう？」

きみはただ、ごじまんのとげのせいになっているだけなんだ。そうやって、きみは自分のみつがどれだけあまくて、おいしくて、かちがあるものかをたしかめてはよろこんでいるんだよ。そう、『わたしのみつがほしいなら、このとげとげを乗り越えてきなさいよ。そうしなければ簡単にみつはあげないわ！』ってね。」

「ちがう、ちがう！なんてあなたはいじがわるいのかしら。わたしはあなたを傷つけるかと思ってしんぱいだったのに！！いやよ、いや。何よいじわる！あなたになんかわたしのみつはあげないわ。あ



「うちへいつてちょうだい！」

ふふつとはちはわらいました。

「ねえ、ばら。きみほどあまそうで、おいしそうで、気高い花ははじめてだよ。きみときたら、ぼくのいうことをまるでききやしない。ほかの花は、ぼくがなんともいわないうちにみつをさしだしてくるんだもの。」

「そんなこといったって、あげないわ。きれい、あなたはきれいよ。よそへいつてよそのみつをもらってかえればいいでしょう。」

ばらは、なんだかわからないはずかしさとかなしさとで、ぽろぽろなみだをこぼしながらいいました。

「ほら、あっちへおゆき。わたしはもうつかれたのよ。もう日がくれて、星のつゆがそらをぬらす時間なの。おかえりなさいよ、ねえはちさん。」

はちはそれでもにやりとわらって、いいました。

「きみがみつをくれるなら、いつだってここにきて話相手になってあげる。ねえ、ばら。あしたもぼくはここに来るよ。きみのみつと、きみにあいね。」

はちはぶうん、と飛んで行き、やがてすがたはみえなくなりました。

「ああ、つかれたわ。もうねむらなければ……」

そういつて、ばらはねむりにつきました。

つぎの日、おひさまもまだおきたばかりの時間のことでした。

ひとりのニンゲンが、ばらをみつけたのです。

「おやまあこんなところにすてきなばらが。これは私の家のげんかんをかざるのにちょうどいい。」

ニンゲンは、そういつてはさみでばらのくきをぱちんときりおとしました。

ばらはびっくりしましたが、いたくもなんともありませんでした。

しばらくするとニンゲンは、水を入れた、ながほそくて透明ないれものにばらを入れました。

「きれいだね。」

「きれいだね。」

ニンゲンは、ニンゲンたちは口々にいいました。

「こんなきれいなばらは見たことがない。」

ばらはそういわれるたびに、くすぐったくてうれしいきもちになりました。

ああ、わたしはきれいなね。とげとげがあつたつて、みつをあげられなくたって、いいの。わたしはきれいだからほめられているのだわ。わたしがきれいだから。

ニンゲンたちは、わたしがきれいなばらであるだけで、ほめてくれるのだわ。なんてなんてうれしいことかしら。

ばらは、うれしくてうれしくてふるえました。そうしてなおもきれいになるつと、水にひたつた足元からぐんぐんといよいよぶんを吸い上げました。

その時には、ばらは昨日のはちのことなんてすっかり忘れてしまっていました。

それから何日かたちました。ばらはさいきん、元気がありません。

じまんのもえるような花びらは黒ずんできましたし、なんだかこしも曲がつてきたみたいです。

「おかしいわね。なんだかさいきん元気がでないわ。まどからおひさまが照っていらしているのに。葉っぱもしゅんとしてしまって。」

ばらは、枯れようとしていました。土から吸い上げられるえいようとニンゲンが毎日とりかえる水のえいようでは、やっぱり土のほうがいいのです。

「ああ。辛いわ。苦しいわ。どうしたのかしら。」

ばらがニンゲンに苦しさを訴えようとしても、どうにも伝わりません。ニンゲンはあいかわらず、ばらを見て、きれいだね、というばかりです。

「そうか、わたしはここで枯れてしまうのね。でもいいわ。わたしはこんなにきれいだってほめられたのだから。きれいだってほめられて、わたしは満足してるのよ。」

ばらは自分にそう言い聞かせましたが、なんだかさみしいきもちでいっぱいになりました。

「やあばら。おまえはあいかわらずきれいだね。けれども、前に会ったときよか、いくぶんか元気がないみたいだ。」

びっくりしてばらはふりかえりました。すると、そこにはいつかにあったはちがいたのです。

「はちさん、どうしてこんなところにいるの？」

はちはぶん、と羽をならして言いました。

「このまえきみに会ったとき、ぼくは『明日あいに行く』といっただろう？だのに、きみはもうあの場所にはいなかったじゃないか。これでもずいぶん探したんだ。」

そういつてほえむはちに、ばらは弱弱しく笑いかけました。

「そうだったわね。でもごめんなさい、はちさん。わたし…」

「おや。まだきみは虫にみつをあげないつもりかい？それは花の自分をまつとうしていいことになるじゃないか。きみは、なんだってそんなにきれいに咲いているのさ。」

そうはちに問われてばらははつとしました。そうです。いくらきれいだきれいだと言われても。ニンゲンにきれいだといわれるためにばらがきれいなのではないのです。

それから、ばらははちを見て気がつきました。はちは、羽がぼろぼろだったのです。足も一本もげていました。それでもはちは、にこにこ元氣よく笑っています。

「…そうね、そうだわ。わたしはみつを虫たちにあげるために咲いたのね。わたしのみつで、すこしでも長く虫たちが生きのびられるように。ああごめんなさい、はちさん。」

わたしがもうちょつとりこうで、もうちょつと考えが足りていたらあなたは羽をそんなにぼろぼろにしないで足もりっぱにそろっていたのでしょうね。」

はちは、おどろいて自分の体をきよときよと見まわしました。

「ああ、これかい。べつに気にしなくったっていいんだよ。ぼくらは皆女王のためにこうなるのさ。それに、どのみち僕らはもうすぐ死ぬからね。冬が近いんだ。」

それをきいて、ばらは悲しくなりました。

「死んでしまうの？ 可愛いそうに。」

ぽつりと言葉をもらしたばらに、はちは言いました。

「かわいそうなんかじゃないさ。僕らはいっしょうけんめいはちの本分をまっとうして、いっしょうけんめい生きたから。」

そうです。はちはいっしょうけんめいみつを運びました。はたらきました。それはとても満足なことで、何より楽しいことでした。

「…わたしは、ばらの本分をまっとうせず生きてきたのね。ただきれいだ、きれいだって言われて喜んで。それだけだったのに。」

さみしそうなばらは言いました。なんだか、はちがとてもきらきらとかがやいて見えたのです。

「ねえ、ばら。きみはうつくしい。花の本分はみつを虫にわけあたえることだけれども、ばらはきれいであることも本分なのじゃないかとぼくは思うんだ。」

ばらがきれいじゃなかったら、虫はきみみたいなとげとげした花なんて見向きもしないもの。」

それを聞いたばらは、少しばかりうれしそうに笑いました。

「ありがとうはちさん。そういつてもらうとうれしいわ。じゃあ、わたしもこんどは花の本分をまっとうしてみようかしら。ね、みつ

をもつていつてくださらない？」

「おや、ばかに素直じゃないか。どうしたんだい。」

ばらは、やっぱり弱弱しく笑いながら言いました。

「このまま、花の本分をまっとうしないで枯れるのが少しいやになったのよ。」

はちは、うんうんとうなずきました。

「なるほどね。きみが、さっきから元気がなさそうだったのは、もう枯れるからなんだね。」

につこりと笑ったはちは、ぶうんと羽をばたつかせ、ばらの花びらに乗りました。

「では、もらってゆくよ。ああ、なんだい。とってもあまいあまいにおいじゃないか。今までもらってきた、どんな花のみつよりかがくわしい。」

「ふふふ。ありがとうはちさん。」

ばらはくすくす笑いました。やっぱり、弱弱しくです。そんなばらに、はちは語りかけました。

「ばら。きみはこれから枯れるし、ぼくは冬の寒さで死んでしまう。だからこれでお別れかもしれないけれど、ぼくは今日きみに会えてよかったよ。」

そうはちがいうと、ばらはこれまでのどの笑顔よりも美しく、笑いました。

「わたしもよ、はちさん。おかげで、わたしは花の本分をまっとうすることができたわ。」

「お互いさまだよ。それじゃあね、ばら。いい夢を。」

「さようなら、はちさん。」

ぶうん、とはちは飛び去っていきました。いい夢を。そう言われたのはじめてです。

いい夢を。なんてすてきな言葉でしょう。ばらは、これから数えるほどであろう夜が待ちどおしくなりました。言葉のとおり、今夜からいい夢を見られそうな気がします。

つぎの日の朝のことです。ばらが目覚めることはありませんでした。

昨日の夜に、ばらが枯れそうなことに気がついたニンゲンが、ばらをドライフラワーにしたからです。



木のつるやいろいろなかざりものを輪っかにしたもののまんなか  
みごとなばらがかざられていました。それは、あくる日のニンゲ  
ンたちのお祭りのためのものです。

ぼん、とニンゲンがまどぎわに輪っかをおくと、まどからはちが  
やってきました。

「やあばら。なんだかかわったところにいるじゃないか。から  
から乾燥して、それでもきみはうつくしいんだね。」

ばらは答えません。答えるはずはありません。はちもそんなこと  
は分かっていません。

「ばら。きみはそうやって、死んでまでばらの本分をまっとうし  
ている。すごいじゃないか。」

はちはそれっきり、動かなくなりました。どうやら、眠ってしま  
ったようです。

## （後書き）

読んでくださってありがとうございました。

この話は、僕が中学生の時に思いついたものです。

思いついた当初は、実は童話単品ではなく当時書いていたノワールまがいの小説の付随作品でした。

でも、単品としていつか出してみたかったという思いもあって今回書いてみました。

童話は難しいですね。どこまでが平仮名でどこまでが漢字で良いのか、この境界線が難しいです。

この話にかけた時間は、一週間くらいでしょうか。前半と後半を書くのに中途半端な時間が空いてしまいましたので、それ以上かけたのかもしれませんが分かりません。暫定的に一週間とすることになります。

この話は、当時バラのモチーフが好きすぎて薔薇に狂っていた馬鹿な僕のレクイエムとして執筆します。

ごめんなさい格好よく言ってみたのですがいまいちでしたね。恥ずかしい。

童話って、難しい。

今回はそれを思い知らされました。

4月 某日 午前0時42分

宵之口 闇太郎

こんな遅くに何やっている。自分。

ところで、この話に当てはまるカテゴリーがあんまりないのは何故。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1489e/>

---

ばらとみつばち

2010年10月12日21時03分発行